

第 127 話<労働組合>の要約と参考資料

第 127 話<労働組合>の要約

土呂久鉱山労組は、焙焼炉新設のとき、大切坑水没後の休山のとき、会社の方針に同調しました。労資協調の背景を探ると、土呂久における農民各層と鉱山との複雑な利害が見えてきます。その一隅に、もっとも激しい健康被害を受けた亜砒焼き労働者が位置していました。

第 127 話<労働組合>の参考資料

1 2 7 - 1 土呂久鉱山労組の活動のあと

1953（昭和 28）年 5 月末 土呂久鉱山労働組合が御願状で、住民に亜砒焼き再開の説得運動

6 月 土呂久労組作成の煙害予想範囲地図

7 月 11 日 朝日新聞記事。「ヒ鉱製錬で“浮かぶ労使” / 土呂久鉱業所に試験炉設置陳情 / 県側も協力を約束」によれば、土呂久鉱山労組の組合長が、県労評の副議長とともに県の経済部長を訪ね、亜ヒ酸焙焼炉建設に協力を求めた。

7 月 12 日 日向日日新聞記事。「一寸待った！ / 土呂久鉱山新焙焼炉 / 煙害恐れる部落民 / 労組の戸別訪問もソッポ」によると、鉱山労組は会社側に同調、5 月末に土呂久各戸に“御願状”を送ったり、組合員による戸別訪問説得運動を行ったりして、新焙焼炉建設に賛成するように働きかけている。

1955 年 5 月 12 日 労組（小笠原武委員長）賞与とベア要求

5 月 社長回答「賃金上昇認めないが、賞与は要求に沿う」

7 月 3 日 組合から会社への返事。「回答認められず、交渉当事者を全金委員長とし、交渉権一任」

7 月 23 日 西斜坑下りより不時の大湧水

1957（昭和 32）年 4 月 12 日 大切坑第 2 斜坑地下 156m から湧水

11 月 13 日 延岡労基署が土呂久鉱業所で「給料 1 か月半遅配」問題を調査

12 月 西臼杵地区労が町長と町議会議長あて「土呂久鉱山の発展策について建議要請書」提出

1958 年 1 月 10 日 「1 年ぶり、明るい表情 / 給料遅配も解消」（興梠記者執筆記事）

7 月 11 日 大切坑第 2 斜坑地下 110m から出水

7 月 20 日 土呂久鉱山が休山宣言。従業員 107 人に解雇通知。組合が受け入れる

7 月 21 日 労組（小笠原武委員長）と会社側が退職後の問題の協議を始める

10 月 住友金属鉱山の系列下にはいる

1959年2月 操業再開

*百科事典マイペディア 「全国金属労働組合」とは：

略称は全国金属または全金。機械金属関係の産業別単一組合。1950年総同盟傘下の全国金属産業労働組合同盟（全金同盟，1946年結成）の左派が分裂して結成。1955年最初の産業別統一闘争に参加。1958年産別会議系の全日本金属労働組合を吸収した。1989年全国機械金属労働組合と組織統一をし，全国金属機械労働組合（金属機械）を結成。さらに1999年金属機械はゼンキン連合と組織統一してJAM（2005年組合員40万人，IMF-JCに加盟）となった。連合に加盟

127-2 新聞記事等の資料で見る土呂久労組の動き

1. 朝日新聞宮崎版記事（昭和28年7月11日） *第113話と重複

ヒ鋳製錬で“浮かぶ労使” / 土呂久鋳業所に試験炉設置陳情 / 県側も協力を約束

西臼杵郡岩戸村土呂久中島鋳業土呂久鋳業所労組佐保組合長は9日、県労評門田副議長とともに保坂県経済部長を訪ね、アヒ酸製錬のための試験炉新設に協力して欲しいと陳情した。

同鋳業所は月産銅60トン、銅ヒ鋳47.8トン、ヒ鋳7.8トン（本年6月現在県商工課調べ）を出す小規模な銅山で、昭和16年までは同所でヒ酸を製錬して利益をあげていた。ところが煙害を被るとの部落民の反対があつてヒ鋳のバイ焼をやめ、以来鋳石は原石のまま宮城県に送っている。原石のまま遠く輸送するため採算がとれず組合員（55名）は5500円ベースという低賃金に苦しんでいる。もし同所がヒ鋳を製錬すれば月60万円の利潤が上り、労使ともに助かるばかりでなく、鋳石の埋蔵は多大でありネコの額ほどの田畑で苦しい営農をやっている地元民にも副収入を与え、将来は県の重要産業にも発展する可能性がある」と強調している。

部落民は反対意思を翻していないが、同鋳業所は鋳石には硫黄分が少なく、炉も吸収力の強い性能のよいものができる今日、煙害は昔ほどなく、児湯郡西米良村松尾鋳山も同じ方法で部落民の協力のもとに経営をつづけているといい、部落民の理解をうるよう県労評も側面から啓蒙運動を実施すると約束、保坂経済部長は「資源開発の意味からも協力するが地元民の納得が大切だ」と答えた。

2. 日向日日新聞記事（昭和28年7月12日） *115話と重複

一寸待った！土呂久鋳山新焙焼炉 / 煙害おそれる部落民 / 労組の戸別訪問もソッポ

無尽蔵な砒鋳をもつ西臼杵郡岩戸村中島鋳山KK土呂久鋳山はさる16年ばい焼による煙害のため部落民の猛反対でばい焼を中止し、以来12年間煙を吐かず、又砒鋳石の商品価値低下から経営不振に陥り、閉鎖説まで起こっていたが、昨年末打開策としてば

い焼で含銅砒鉍石を分離して品質を高めるための新型ばい焼炉（被害百メートル以内）設置を計画したが、部落民から再び反対が出て対立、新たな問題になっている。近く県でも現地調査を行う事になった。

同鉍山は大正 6 年創立、月 3 万ポンドをばい焼、焼殻は土呂久川に流していたため“畜産土呂久”といわれ明治末期 30 戸に馬 85 頭、牛 65 頭もいたのが次々とへい死し、みつばちも死に果樹、梅、椎茸、スギ、竹もほとんど全滅するという有様だった。昭和 10 年中島 KK が事業を受継ぎ焼滓たい積場を設け、補償金も改善して来たが、部落民の反対熱はさめず、16 年契約期限がきれた際、ばい焼を中止してしまった。このため同鉍山は衰退の一途だったが、昨年末地下資源開発、亜硫酸採取、銅鉍の品質向上、経営不振打開などを目標に工費 120 万円で新型ばい焼炉を計画したが、依然部落民の煙害に対する悪感情は消えず、再び対立的空気をみせている。

会社側では 3 月末土呂久、立宿部落代表に松尾鉍山を見学させ、同鉍山より 42%も有害ガスは少く 100 メートル以外は無害であることを力説、またばい焼炉による利益は年間約 600 万円でうち半分は同部落出身の従業員などの給与となって村に吸収され、被害があれば中止し補償も認めるなどを知らせた。また同鉍山労組も会社側に同調、5 月末各戸に“御願状”を送り、また組合員による戸別訪問説得運動を行っている。

一方、同部落には 60 年前から親ぼく機関“和合会”があり、村議会以上の実権をもち、同問題に関して村当局は一切を“和合会に”まかせ、村議会も態度保留している。部落民のうち絶対反対が 24 名、中立の 29 名も“和合会”に同調、賛成 7 名という状態で現在部落民説得の見通しは暗い。

3. 昭和 30 年土呂久鉍山経営軌道に乗る

根本亨「会社季刊誌の発刊を祝す」（中島鉍山季刊誌創刊号、昭和 31 年 4 月 30 日発行）

昭和 29 年 1 月 27 日、下 3 番坑で待望の鉛亜鉛鉍体に着脈するに至ってから、社運は漸次発展の方向に進み、昨年 7 月 23 日、西斜坑下りより不時の大湧水事件があったにもかかわらず、着々坑内外の機械化をととのえ、生産量倍産（月精鉍 800 屯）の態勢となり、既に数年来の懸案たりし、砒鉍連続焙焼炉も、昨年 3 月末より操業に入っており、又、ディーゼル自家発電も、本年になって整備全く完了し、最早本年の台風時には、保安用電力は勿論、社宅電灯も灯り、ラジオ情報も分り、的確なる判断のもとに、台風に対処する事が出来る事になりました。

4. 1957（昭和 32）年 11 月 14 日 興梶敏夫記者執筆記事

給料 1 カ月半が遅配 / 浸水の中島鉍山 / 土呂久鉍業所

延岡労基署は 13 日西臼杵郡高千穂町岩戸地区土呂久、中島鉍山株式会社土呂久鉍業所（木立利雄所長）の従業員に対する給料遅配問題を調査のため来山、同鉍山労組（組合員 80 名）執行委員長小笠原武氏と会談した。同鉍山は 4 月新鉍採掘中水脈に行当り、坑内

の浸水がはげしく、出鉱量が減る半面排水施設と電力浪費のため事業の不振がつづき給料の遅配となったもので、現在 9 月分 2 分の 1 と 10 月分がおくれている。

小笠原委員長の話 現在の操業状態からみて会社が苦しいことは自分たちにもよくわかっている。会社の経営が成立ってこそ我々の生活権も護られることになるので、この際会社の事業を中止してまで給料の支払いを要求する考えはもっていない。10 月からは採鉱量も幾分盛り返し砒素 250 トン、方鉛鉱 500 トンを採鉱している。金額に見積っても 7 ～800 万円と思う。我々の協力に対しては会社も秘密企業をしないでほしい。

会社側の話 12 日まで全員の協力で排水の方も処理ができ見通しもついたので 12 月までには遅配もなくなると思う。

5. 1957 年 12 月 西臼杵地区労の「土呂久鉱山の発展策について建議要請書」

土呂久鉱山の発展策について建議要請書

紹介議員 田尻晴資

西杵労評第 28 号

1957 年 12 月

西臼杵地区労働組合評議会 議長 大賀正人

高千穂町長 佐藤 寿殿

高千穂町会議長 矢津田義武殿

土呂久鉱山の発展策について建議要請書

岩戸地区土呂久鉱山は、古く藩政時代より開発せられ、昭和初頭以来輝かしき採鉱選鉱の実績により、旧岩戸村政は為に飛躍的發展を遂げた事があり、現在の中島鉱山経営に見るも昨年より本春まで、月産 650 トンの好成績を収めながら、本年 4 月 13 日よりの湧水以来、頓にその生産低下を見、経営不振と従業員の生活困難を（1 字不明）しつつある事は御承知の通りであります。

本年 9 月以来従業員の給与は 1 乃至 2 ケ月の遅配となり、笹之戸、三田井地区よりの現物借用等により、辛うじてその生計を支えている現状であります。従って、現在の経営不振が改善せられざる限り労資共に将来に対する見透しは誠に暗澹たるものありと言はねばなりません。然も之は唯、該鉱山の浮沈のみに止まらず農村二、三男就業対策、中小企業の興廃は勿論笹之戸、三田井地区の盛衰にも至大の影響をあたえるが故に町の進運の試金石として深甚なる関心を寄すべき重要件案であります。

私達は具さに現地に於て実状を視察し、従業員の困難と土呂久、岩戸地区町民の沈滞せんとする意向を知るに及び、町当局並町議会が早急かつ強力なる行政力を以て、土呂久鉱山の発展策に取組まれると共に、左記諸点について審重適切なる御討議を願いたく建議すると共に要請致します。

尚、本件は次期町議会に付議せられ何分の御回示を願えれば幸甚と存じます。

記

- 一、土呂久鉱区表によれば、現在の採鉱地区は全体の幾%にも達していない状況であるので、この豊富な未利用資源の開発を新年度町政の主要目標に加えられ、調査研究費用及県の通産省に対する調査要請費用並に資本誘致費用等を正式に予算計上せられるよう建議します。具体的に効果を発揮するには最低 50 万円を要すると思はれます。
- 二、日之影町では、11 月 26 日より千軒平地区に対する通産省の鉱区調査団を招いているが、当局に於てもかかる調査団招致を真剣に考慮されたい。
- 三、鉱区開発のための資本を誘致するには、その規模は比較になりませんが、県が行っている細島港の条件等を参考に、住宅建設、道路の改善、町民税の当初年度の減額、福祉厚生面の協力等資本家の投資意欲をかき立てるような条件を整えることについて御検討をねがいます。
- 四、従業員宿舎より鉱区までの距離が遠いものが相当居り、重労働に耐える条件を改善するため、道路整備の速度を早めバス開通を促進する事について真剣なる御討議を要請します。

6. 昭和 32 年中島鉱山株式会社営業報告書

労働事情

当期末在籍従業者数は、職員 47 名、鉱員 147 名、計 194 名となり、前期に比して 26 名の減少となりました。新木浦採鉱中止により解雇者 32 名、土呂久転勤者 10 名（内職員 3 名を含む）による人員整理を行いました。労働組合の状況は、各事業所の係長以上を除き組織されている組合員数は、172 名となっており、当期に於ける組合との交渉は各所長のもとに、夫々円満に妥結し、労使関係は平穩に推移致して居ります。

7. 1958（昭和 33）年 1 月 10 日 興梠敏夫記者執筆記事

1 年ぶり、明るい表情 / 復旧成った土呂久鉱山 / 給料遅配も解消

西臼杵郡高千穂町岩戸地区土呂久鉱山は昨春坑内の出水で事業不振となり、従業員の給料遅配が続いた。このため西臼杵地区労評では資金カンパをするなど救援に乗出したが、12 月に入り排水作業も急ピッチで進み、月末には月産目標 800 トンに対し 700 余トンにこぎつけ、31 日には従業員 130 名に越年手当 5 千円から 1 万 5 千円を支給、1 月 10 日には遅配も解消することになり、1 年ぶりに全山は明るい表情を取りもどしている。堀越鉱務課長の話 長い間各方面に御心配をかけました。従業員も地元の人が多く、山の事情をよく知っているので、会社の立場を理解し協力してくれたので予想以上に早く復旧、今月からは予定どおりの採鉱が出来るとみな張り切っています。

8. 1958（昭和 33）年 7 月 22 日朝日新聞記事

第 126 話と重複

廃鉱休山に決る / 中島産業土呂久鉱業所

西臼杵郡高千穂町岩戸の中島産業土呂久鉱業所が 20 日廃鉱休山することになった。

これはさる 4 日から第 2 斜坑の 11 番坑を掘進していたところ 11 日午後 8 時半水脈にぶつかり毎分 1.7 から 2 立方メートルの水が噴き出し、11 番坑から 14 番坑まで坑内を水びたしにした。わき水は二昼夜で満水となり排水不能になった。鈴木社長は 19 日東京から来山、現地で重役会を開き資金難による休山を決定し、20 日には作業員 90 人、事務員 17 人の全従業員に解雇通知を出した。

同鉱山労組では、会社の措置を全面的に受入れている。

9. 1958 (昭和 33) 年 7 月 22 日宮崎日日新聞記事 * 第 89 話と重複

土呂久鉱山閉鎖 出水に悩まされて

昨年 4 月から出水に悩んでいた西臼杵郡高千穂町土呂久鉱山 (所長木立利雄氏、中島鉱山=本社東京都新宿区、社長鈴木仙氏) はついに 20 日閉山を宣告、21 日から会社側と労組側代表 (小笠原武委員長) が退職後の問題について話し合いをはじめた。

10. 1958 (昭和 33) 年 7 月 24 日宮崎日日新聞記事 * 第 89 話と重複

土呂久鉱山 四百年の伝統を断つ 滝のような湧水 行先まっくらの従業員

400 年の伝統を持つ西臼杵郡高千穂町土呂久鉱山=本社東京都新宿区中島鉱山=が昨年 4 月からの出水による全坑内の水浸しで、さる 24 日、とうとう閉山を宣告した。年間 1 万トンのスズを生産する有名鉱山ただだけに惜しまれ、一方では職を失った従業員 150 人 (うち 60 人は木浦選鉱所) のこれからの生活をどうするかが大きな問題になり山は暗い表情に包まれている。

127-3 土呂久労組小笠原武委員長

「小又」の墓碑

武の父 利三郎 昭和 37 年 3 月 16 日 82 歳

武の母 イセノ 昭和 49 年 3 月 12 日 80 歳

母・小笠原イセノさん

佐藤鶴江の家系より

イセノは、鶴江の叔母。(=父富高砂太郎の妹)

喜右衛門の腹違いの姉タカの娘。(=佐藤喜右衛門の姪)

阪本暁「日教組第 24 次教育研究全国集会報告書」より

II 死者の生前の声

小笠原イセノさん (74 歳) 昭和 49 年 3 月 12 日死亡

肺がんの疑い。慢性ヒ素中毒の疑いありと住民検診のカルテに書かれている (宮崎

日日新聞より)

第3次検診を受けずして死亡(第2次検診者)。未認定患者。

川原メモ

気道がん：昭和49年以降に発病した例(昭和53年末現在)

小笠原イセノ 部位：肺 発病時：81歳 発病までの居住期間：80年

従事歴：団子づくり11年 認定：無 備考：ボーエン病併発

父・小笠原利三郎さん

佐藤三代士さんの話(1983年1月28日聴取)

利三郎は「町」の森三郎の親家(跡取り)だったが、そこを出て「小又」をつくった。
小又には、土地がありません。

佐藤実雄さんの話(1979年12月20日聴取)

利三郎はイセノと結婚。「町」は弟の要三郎がついだ。

127-4 公害と労働組合運動

法政大学・大原社会問題研究所の書籍より(高妻三郎氏のメール)

労働運動との交差

この流れと労働運動の文脈はどのように交わるか。『月刊総評』は、1960年初頭、日本最大の組織人員(14)を擁した日本労働組合総評議会の月刊誌である。総評は、1964年、公害労災センター(仮称)の設立計画を示し、1966年に「日本労働者安全センター」を立ち上げた(～1989年)。同センターは『月刊いのち：労働災害・職業病』という機関誌を1967～89年の間発行しているが、同誌は「公害」を直接特集することはなかった。総評傘下の合化労連(15)や個別組合のレベルでは、地域の具体的現実に応じた独自の動きがあったと思われるが、全容把握はなされていない(一部を後述する)。

労働運動の「指導的立場」とされた共産党、社会党などいわゆる「革新勢力」はどうか。センター設立構想と同年、衛生工学者の庄司光(『恐るべき公害』著者)が、『月刊社会党』誌上で「公害」の認知を呼びかけている事実からしても、社会党-総評というラインの中央部が「公害」を意識した速度は、世間一般とあまり差がなかったようにうかがえる。「革新勢力」が本格的に公害に取り組む姿勢を打ち出したのは1967年頃で、『前衛』(日本共産党月刊誌)、『月刊社会党』がそれぞれ公害を特集している。これは公害対策基本法制定の年にあたり、その歩調は政府と似たものだった。その後社会党は、1968年末に「いのちとくらしを侵す公害追放運動」に取り組むことを決め、

1969年初頭より、「公害総点検運動」を22の都道府県で行い、その報告として『住民の公害白書—いのちとくらしをおかすものへの告発』（日本社会党公害追放運動本部編、1970年）をまとめている。共産党も、1967年と1969年に「日本共産党の公害対策」を示し、『公害列島—その実態と解決の道』（日本共産党中央委員会出版局、1970年）を出した。これに合わせて「労働組合」や「労働者」の「公害闘争」（『旬刊賃金と社会保障』1970年、『月刊労働問題』1971年、『労働・農民運動』1970、1972年など）や「職業病」「労働災害」（『総合臨床』1969年、『ジュリスト』1971年など）が注目されているという構図が読みとれる。